ともに歩もう 石巻だより

伝えたい。過ぎ去った日々のあの笑顔を。
暗闇に立ちすくんだ時、
この記録が足元を照らす光となるように。
そしてまた明日の朝を迎えられるように。
朝日新聞社員がつづる。

子どもたち

あの日、帰らぬ旅に出た
子どもたちの記憶を刻みます

美谷島健ちゃん［1976年6月18日生まれ］と一緒に③

歩みが遅い人も、最後の一人まで、おいてきぼりにしない

日本航空123便（ボーイング747型機）が群馬県上野村の御巣鷹山に墜落し、乗員乗客524人のうち520人が犠牲になったのは1985年8月12日。それから30年経つ2015年8月、日航機の最後の地を、東日本大震災で子どもをなくした親たちが訪れた。あの日にどう向き合ったらいいのか、救いを探し求める。御巣鷹山で、当時9歳の次男、健ちゃんをなくした美谷島邦子さんに、今日に至る思いを聞いた。

子どもをなくしてね、いかに一生懸命生きるか。それしかないと思うんです。それによって、助けてくれる人も出てくる。自分にとって学ぶ場になる――。

そう今はわかるのですけどね。実際にそれを求めていたわけではなくて。なくなった子のために、出来ることはないか、ないか、と考えていただけなんです。

〈健ちゃんは小学3年生だった。123便の旅は初めての一人旅。その夏にプールで25メートル泳げたことへのご褒美だった。大阪の叔父家族を訪ね、阪神甲子園球場で全国高校野球選手権大会の観戦を楽しみにしていた。夕刻、美谷島さんは搭乗口まで見送った。別れ際、健ちゃんは「ママ、ひとりで帰れるの？」。一人旅への自分の不安は口に出さず、母を気遣った。そして日航社員と手をつないで機内へ。母に背を向けてから、その社員に言った。「ママにすぐ会えるよね」。事故後、社員はその言葉を手紙にしたためてくれた〉

事故から4年目、5年目。「何していた？」と振り返っても一日一日が精一杯。「でも生きていたよね」としか言えない。

痛みの中でしたね。ちょっと肌をこすれば、ぱーっと血が噴き出るよう。悲しみより血が噴き出る、そんな時期ですね。1年目とはつらさが違う。

私たちは遺族同士で話せたのでよかった。どこかで言わなければ、どんどんたまっていってしまう。うちではみんな『おすたか』に書いてくれて。

〈1985年12月、遺族たちが集まって「8・12連絡会」をつくった。当時38歳の美谷島さんが事務局長になり、羽田空港に近い自宅を事務局にした。励まし合い、助け合い、一緒に霊を慰め、世界の空の安全を求めて活動する会だ。会報も発行した。その名称が『おすたか』。これまでに102号を発行している〉

悲しみの色は一人ひとりちがう

インターネットがまだ普及していない時代でした。

全国の会員から届くお手紙が毎日、自宅のポストいっぱいにたまり、事務局のみんなで泣きながら読んで、返事を書いて。当初はガリ版。鉄筆で手書きしていました。

最初の頃だけ、親しい会員同士で「子どもをなくすほうがつらいわよね」と言ってしまうこともありました。でも、すぐにそれは絶対、言わなくなる。

『おすたか』の果たした役割は、そこだと思っているんですよ。

悲しみの色は一人ひとりちがうのだと分かる。同じ家族の中でもまったくちがう。

『でんでんむしのかなしみ』（新美南吉作）と同じですね。ただ、それも口にしなければ気づけない。言える場があることが大事ですね。

「私には想像もつかない、全然ちがう悲しみがこんなところにある。でも、こんなにつらくても、この人は生きようとしているじゃない」と思った時に、自分も力をもらえる。

〈日航機事故では大黒柱の父親をなくして母子だけになった家庭が多かった。妻と子ども3人をなくして一人きりになった夫もいた。生まれてくる子を夫に見せられなかった妻もいた。娘3人をなくした親もいた。息子一家全員をなくした親もいた〉

肉親をなくし、立ち止まったきり、歩けなくなる人もいます。周りが無理やり引っぱることはできません。自分で歩き出すのを待つしかない。

再び歩き出す力を、誰もが持っていると思うんです。

その力を周囲がいかに引き出せるか。周りの人たちの涙を自分の涙として感じられれば、「私はひとりじゃないんだ」と思える。

歩みがゆっくりの人もいます。最後の一人までおいてきぼりにしない、というのが被災者支援で一番大事なことだと思います。

〈日航機の犠牲者は、家族で乗った人々もいるため、401世帯を数える。数十世帯の遺族で始まった「8・12連絡会」は86年8月には280世帯まで増えた〉

事故の半年後、客室乗務員のお母さんたちが私の家を訪ねてきました。「健ちゃん、ごめんなさい」と。お母さんたちも娘さんをなくしてつらいのに。

「お母さんたちが謝ることはないんですよ」。そうお話しして、一緒に連絡会に入ったんです。私たちはパイロットたちを責めたことも一度もありません。本当に一度も。

最近でも連絡会に入る人がいます。2013年も。14年も。

「山にはよく登っているんだけど、私も連絡会に入る」と声をかけてくださった人がいました。連絡会の活動をテレビや新聞でずっと見ていたのですが、「子どもたちにも伝えてもらわなければ困ると思って」と。ご自分が出来なくても、娘たちに発信してもらおうと入ってくださった。

連絡会では今、父親をなくした若者がホームページをつくっています。私は「遺族同士で傷つけ合うことは、絶対にだめ。それ以外は何をやってもいいから」と話しています。

忘れないことが一番ほしかった

持ち主がわからない遺品についても、連絡会では事故後1年目から永久保存を求めてきました。事故機の残がいも保存し、後世に教訓を伝えるため、広島の平和記念資料館のような形で展示することを要望してきました。

〈1985年9月、事故機の製造元・米国のボーイング社は、78年の「しりもち事故」後の修理に不手際があったことを発表した。86年、「8・12連絡会」は「事故原因は構造的な安全無視の姿勢にある」として、日航、ボーイング社、運輸省（現・国土交通省）の幹部らを刑事告訴。90年、全員不起訴が決定。91年、連絡会の中に「残存機体保管部会」ができ、日航と会合を重ねた〉

不起訴になったからといって、この事故をなかったことには出来ません。私たちは二度と事故を起こしてほしくない。だから、残がいも遺品も残してほしいと、ずっと求めてきたのです。

2006年、日航は羽田空港の近くに「安全啓発センター」を設置しました。そこで残がいも遺品も展示し、一般に公開することになりました。

公開初日に訪ねました。私は事故後、飛行機を見るのがつらくて、羽田も、自宅から近いのですが、なかなか行けなくて。行くとなると、決死の覚悟が要ります。ところが、初日に訪ねた時、「心が癒やされました」と口にしたんです。

日航と遺族の語り合う場が出来て、これで安全の扉を一緒に開けられる。後世へ安全を発信していける。そう思って。「癒やされた」という言葉が出たのには、自分でもびっくりしました。

私たちが何を求めてきたかというと、日航がこの事故を忘れないこと。それが、私たちは一番ほしかったんです。こんな事故をもう二度と起こしてほしくない。だから、この事故を絶対、忘れちゃいけない。どんなことがあっても、それだけは言い続ける。

ただ、その気持ちが決して事故後1年目から日航に伝わったのではなく、21年目ですよね。でも、今の世の中は、私たちの21年より絶対、短くなっているはず。そのために私たちはいるのですから。

〈15年11月。美谷島さんは、クリスマス飾りとオルゴールを持って御巣鷹山を登った。飾りは、健ちゃんの墓標そばのモミの木へ。25年前に植樹した時の丈は約30センチ。今は高さ約10メートルまで育った。オルゴールは、墓標を囲むおもちゃの中へ。そこには野球ボールもある。東日本大震災で息子をなくした両親が8月に届けたものだ〉

冬は閉山になり、クリスマスには雪が覆います。おもちゃは雪の下でも大丈夫。春に行くと、オルゴールも鳴らせますよ。

2015年9月号から今月号まで、「子どもたち」特別編をお届けします。

その間の「明日の風」は休載します。

発行人：小野智美（ono-s2@asahi.com） 川端俊一（kawabata-s1@asahi.com） 発行所：ASA 石巻中央（電話 0225－22－3669）
平成28年1月発行（奇数月1回発行） 第3巻1号（通巻12号）

雄勝巡礼

石巻市雄勝町の港そばの雄勝病院の話から始めよう。

［第12回］

黄色いタオル0・5キロ先へ振る

あの日は夕方6時以降、零下1度前後の気温がつづいた。

氷点下の寒さを脱したのは翌12日の朝8時。石巻市の気象観測所の記録では、ようやく0・2度まで上がった。

その観測所から約12キロ北の雄勝湾。小船で漂っていた看護師のDさんは、朝の光の中、ヘリの音で目をさました。音は聞こえるが、機影は見えない。

隣では事務職員の牧野まり子さん（当時40）が眠っていた。Dさんの3歳上の兄の同級生だ。

「まりちゃん、まりちゃん」

声をかけ、ゆさぶった。

起きない。息はある。

「まりちゃん、まりちゃん」

たたいた。それでも牧野さんは目覚めなかった。

小船の周囲は木材などの漂流物で埋め尽くされていた。

1キロほど先に白銀崎灯台が見えた。病院から海岸伝いに約9キロ南東まで流されていた。

灯台の0・5キロほど手前で動くものがある。船だ。

岸へ行こうにも漂流物に阻まれて立ち往生している様子だ。

（あの船に見つけてもらえなかったら、もう終わりだ）

小船に機関室は見当たらない。が、黄色いタオルがあった。

Dさんはそのタオルを必死に振り、声も振り絞った。

「助けてー、助けてー」

そう。あの時、約0・5キロ沖に黄色い布が動いているのが見えた。ただ、声は聞こえなかった――。5トン船「甲丸」を操縦していた当時52歳の漁師、永沼仁一さんは振り返る。

第二波乗り越えた船が救助に来た

前日、永沼さんは、白銀崎の約5マイル（約8キロ）沖へカレイの刺網漁に出た。

漁を終えて帰る途中、振動が発生した。飛ばされそうな揺れにエンジンが壊れたと思った。

停止ボタンを引っ張った。普通はすぐ止まるのに、振動は続く。数十秒、船は揺れ続けた。あたりに他の船はいない。

壊れたんだなとあきらめながらエンジンをかけてみると、かかった。これはどうなっているんだべなと思いつつ、港をめざす。陸が見えてきた。大須港を次々に出てきた船も。

大須の漁師たちは永沼さんの船に気づき、漁業無線で連絡をくれた。

「いまから津波来っから、陸（おか）さ行かねえで沖でかわしたほうがいいど」

彼らは水深60メートル付近で待機。永沼さんも同じく約1マイル沖で待った。

30分ほど後、桑浜の自宅が気にかかり、近づいた。前方の海域、白銀崎から女川町の離島・出島まで数キロにわたり、潮目のような渦が、白い帯状に伸びている。思い返せば、あれは引き波だったのかもしれない。

大須の漁師たちに「白銀から出島さ潮目つながって白くなってやあ」と漁業無線で伝えた。

その帯を越えると、桑浜のそばの岬、丁名崎（ちょうなざき）が見えてきた。近くの小島はすっぽりと海に沈んでいた。高さ10メートルはある小島だ。

桑浜の約0・5キロ手前、水深約50メートルの所で双眼鏡を構えた。養殖いかだが流されてくる。プロペラに絡まる危険を感じ、沖へ引き返す。

さきほど目にした白い帯状の渦はもう消えている。代わりに、白銀崎から出島まで数キロにわたって、壁のようにそそり立つ波が見えた。

第二波だ。

高さは15メートルほどある。陸に近いところでは、壁のてっぺんに白い波頭が迫り出している。葛飾北斎の「冨嶽三十六景　神奈川沖浪裏」の怒涛のように。「ナイアガラの滝のようだった」と話す人もいる。

巻き込まれたら終わりだと思った。長さ数キロの中間部分では、波頭はまだ迫り出していない。海面が立ち上がった状態のままだ。そこをめざした。

全速力で海をのぼる。時速20ノット（約37キロ）。垂直ではないが、50度はあるかと思われる急傾斜だ。もうだめだ。そう覚悟した。普段は着けない救命胴衣を急いで着た。

乗り越えた。その夜は、7隻の船と共に沖で過ごした。夜が明けると、桑浜へ。だが、岸壁そばに渦があり、近づけない。沖へ戻ろうとした時、約0・5キロ先に黄色い布が見えた。

Dさんは、自分たちへ向かってくる甲丸の姿を忘れない。

永沼さんは甲丸へ2人を運び込んだ。牧野さんはすでに息を引き取っていた。

「3月10日に戻れるなら戻りたい」

永沼さんは、素足のDさんに長靴を渡し、上着を貸して、機関室へ案内した。時計はちょうど8時を示していた。↖

低速で動いていた甲丸の排気管は、わずかに温かい。Dさんは、声も出さず、排気管を抱くようにしてうずくまっていた。

あれは低体温症だったんだな、と永沼さんは振り返る。

Dさんたちが乗っていた小船は、3トン級のウォータージェット船だった。機関室へ入るには、扉を開けるのではなく、上げぶたを外す。夕闇が迫る中、船に詳しくないDさんたちには分かりようもなかった。

甲丸は最寄りの羽坂に向かった。波が大きく上下する。Dさんは、波が上がるのを見計らって舳先から岸壁へ飛び降りた。それから甲丸は雄勝港に向かった。が、漂流物があまりに多く、近づけない。別の小型船に牧野さんを託した。

Dさんは羽坂から消防団のトラックで高台の大須小学校へ。手足は切り傷だらけだった。

小学校で丸一日寝た。

翌日の13日。紙コップ1杯の水を飲み、小学校へ避難してきたお年寄りたちの看護にあたった。仕事のことだけを考えた。

15日。病院職員が車で迎えに来てくれた。内陸の避難所へ向かう。病院前にさしかかった。

職員は一言「見るな」。目を閉じて通り過ぎた。

しばらくの間、睡眠導入剤と精神安定剤をのんだが、毎晩のように津波から逃げる夢を見た。1人きりになるのが怖い。自宅では風呂もトイレも子どもについてきてもらった。

100日目の6月18日。病院で献花式があった。屋上にあがった。あの日以来、初めて。記憶がよみがえる。以後、屋上にはのぼらなかった。

半年が過ぎた9月25日。犠牲になった患者40人と職員24人の追悼式が開かれた。

受付を担当した。式には出なかった。申し訳ない。その思いがこみあげる。事前に手紙を書き、式で代読してもらった。

こう結ぶ。「多くの犠牲者が出てしまい、ただとても悔しくて悔しくてなりません。本当に申し訳なく思っています。震災前の3月10日に戻れるなら戻りたい。私は、たくさんの人たちに助けて頂きました。奇跡だと言われます。まだ気持ちが前に進まない状態ですが、これから私に何が出来るのか考え、行動していきたいと思っています」

1年が過ぎる頃。

津波の夢を見なくなり、あの日に出勤していた職員たちの夢を見るようになった。

2年が過ぎる頃。

「あの人の夢を見たよ」。同僚の看護師と話すようになった。

冬の晴れた日を思い出す。

南向きの病室に光が降り注ぐ。外階段の日だまりでは、細かく刻んだミカンの皮を干した。

入院患者の大半はお年寄りだった。ほとんどの人が脳疾患の後遺症で体を動かせなかった。

にぎりしめたままの手は、むれて、ひふがむけ、におう。

せっけんで洗って、イソジンをつけたが、経費はかさむ。患者の負担にもなる。

職員みんなで知恵を絞り、たどりついたのがミカンの皮だ。

100円ショップで買ってきたティーバッグに詰めて、その手に握らせた。しめたままの脇の下にも、はさませた。

ミカンの季節が過ぎると、緑茶の葉を使った。

失敗談もある。寝間着の中にティーバッグを残して、家族へ渡してしまった。「洗濯機がお茶っ葉だらけになった！」。驚いた家族から一報が入った。

あたたかな日々を思い出す。

女川町議会　福島を視察⑫

動くものがない街 廃墟だと感じた

女川町議会は2014年夏、福島県の福島第一原発事故の被災地を訪れた。震災後初の視察に町議12人全員が参加した。女川町には東北電力の原発がある。東北電力がその再稼働をめざす中、町議たちは福島で何を考えたのか。これまで10人の話を記した。11人目の町議、木村公雄議長（79）の話を、今回と次回の2回に分けて紹介する。

視察は1泊2日。初日は全町避難中の浪江町を訪ねた。原発は町の南隣、大熊町と双葉町に立つ。最終日、大熊町の話を聞くため、約100キロ内陸の会津若松市へ向かった。大熊町の出張所がある。

会合で挨拶に立った木村氏は、謝辞を述べた後、こう続けた。

「御町は、これからが困難の峠越えのよう。放射能は目に見えない。いつ果てるのか。非常に希望のない生活をされている。どうぞ、いつの日にか、必ず再生できる。私どももエールを送ります」

無常観が胸の内を占めていた。

視察後、木村氏はこう語った。震災後初めて目にした浪江町の光景は「非常につらかった」。テレビで見てはいたが、実際に目にするものとは全然ちがう。

震災前も訪ねたことがある。活気があった。人々の明るさが印象に残る。

浪江町を含め南相馬市や相馬市の地域には、1千年以上の伝統を誇る国の重要無形民俗文化財「相馬野馬追」の行事がある。歴史があり文化があり、人々には誇りもあったと思う。「向こう三軒両隣」の親しい近所付き合いがあったろう。義理を重んじ、人情を育んでいただろう。

「それがすべて破壊された」。バスの車窓から、浪江町の中心街に目を凝らして痛切に感じた。建物はあるのに、動くものがない。人も車も犬猫も。風はあるが、物音がない。人が住まない町があれほど寂れるとは。「廃墟」だと感じた。

「町の指導者も、町政に関わった人も、おそらく誰一人としてあのような悲惨な状況に陥ることは予想もしなかったし、考えられないことだったろうと思います」

そう振り返ってから、木村氏は話した。

「本当にね……。いま悩んでいるんですよ、実は。そういう現実を踏まえて、女川をどうするか、ということを」

協力：ASA 石巻中央、がんも大二、羽鳥書店、フロッグキングスタジオ

※「石巻だより」のバックナンバーは羽鳥書店 HP（www.hatorishoten.co.jp）で閲覧できます。